

論 文

思春期とイニシエーションの関連についての研究

京都大学大学院教育学研究科

博士後期課程3回生 小島 純一

Research on the relationship between puberty and initiation

KOBATAKE, Junichi

キーワード：思春期、イニシエーション、移行期

Key Words: puberty, initiation, transitional phase

(1)はじめに

従来、思春期とイニシエーションの関連については、思春期のクライアントを対象とした事例や、思春期の主人公が登場する物語作品について、イニシエーションの観点から個別的に分析がなされてきた。これらの研究は、思春期を生きる青年の心理的な不安定さや行動面の荒れ等の特異性を、未開社会のイニシエーションとの類似性に基づいて象徴的に理解しながら議論を展開する一方で、思春期という時期や概念のいかなる特性がイニシエーション概念と関連をもつのかについての言及は少ない。これは、子どもから大人への移行期に当たる思春期と人生段階の移行を助ける儀式であるイニシエーションとの関連が心理臨床の領域において自明のものとなされてきたためであると考えられることができる。つまり、イニシエーションの観点から思春期像を個々に捉えようとする研究が多数を占める一方で、思春期とイニシエーション概念にいかなる関連があるのかについての理論的な検討は、これまでほとんどなされてこなかったといえる。

後述するように、産業革命以降の近代に見出された青年期の前半に相当し、それ自体が境界的な性質をもつ思春期概念と、近代になって未開社会の中から再発見されたイニシエーション概念の関連について検討することは、多義的で曖昧な性質をもつ心理臨床におけるイニシエーション概念の特徴を明確化することにつながるだろう。

以上の問題意識を踏まえ、本研究では、まず、思春期とイニシエーション概念との関連に関するこれまでの先行研究とその知見の現在地について、小島(2020, 2021)をもとに端的に整理する。そのうえで、思春期概念に含まれるいかなる特性がイニシエーション概念と関連をもつのかについて、主として理論的な見地から三つの視点に分けて論じることを目的とする。第一に、思春期概念が有する境界性と、同じくその境界性が重視されるイニシエーション概念の関連について検討する。第二に、近代社会における制度的なイニシエーションの喪失が思春期・青年期概念を誕生させたことについて論じる。最後に、第三の視点として、未開社会の成人式儀礼において用いられる空間が有する両義性とグレート・マザー

元型の両義性との共通点に着目し、未開社会のイニシエーション儀礼が思春期の自立のテーマを象徴的に体験させる機能をもつと捉えることで、思春期の心理的テーマと関連を有することについて考察する。

(2) 思春期とイニシエーション概念の関連についての先行研究

まず、思春期とイニシエーション概念の関連に関する先行研究の現在地について、小島(2020, 2021)をもとに端的に概要を述べるとともに、新たに両者の関連について理論的・概念的に検討された岩宮(2000)と河合(2005)についても論考を加え、論をすすめる前提として踏まえておきたい。

イニシエーション (initiation) とは、「個人をある特定のステータスから別のステータスへと通過させること」(van Gennep, 1909/2012)を目的とした儀式であり、具体的には、成人式、結婚式、葬式、部族の加入礼などがこれにあたる。未開社会のイニシエーションを収集し、分析を行った文化人類学者 van Gennep, A.(1909/2012)は、イニシエーションのもつ分離・過渡・統合という3つの外的構造や「死と再生」、「聖と俗」といった両義的なモチーフが生じるというシンボリズムに着目し、イニシエーション研究の先鞭をつけた。

宗教学者 Eliade, M.(1958/1971)は、「近代世界の特色の一つは、深い意義を持つイニシエーション儀礼が消滅し去ったことだ」と述べたが、分析心理学を創始した Jung, C.G.(1953/1995)は、「現代人の無意識内容の中にこそ、イニシエーションの象徴表現そのものが、まごうことなき明瞭さで現れている」と述べ、現代人の無意識の中にイニシエーションのモチーフが表れることを見出した。こうして、文化人類学の領域で再発見されたイニシエーション概念は人間の心を理解するうえで重要な観点を提供するものとして、心理学の領域に導入された。

日本に Jung の分析心理学を紹介した河合隼雄もまた、イニシエーションを特に重要な臨床心理学的概念の一つであると考え、心理療法の展開をイニシエーションの観点から理解することの重要性を指摘している(河合, 1975)。河合(1975)は、イニシエーションを「未開社会において、ある個人が成長して、ひとつの段階から他の段階へと移行するとき、それを可能にするための儀式」と定義し、心理療法が内的体験としてのイニシエーションを体験する場になる可能性について論じている。それ以来、わが国ではイニシエーションの観点からクライアントの変容過程を論じた事例研究が発表されてきた(岩宮, 1994; 篠原, 2005 など)。

一方、思春期は、子どもから大人へと成長する移行期にあたり、イニシエーション概念とも関連の深い時期であると考えられている(北山, 1989)。小島(2020)は、分析心理学の立場からイニシエーション概念がどのように発展したのかを検討し、移行期の危機を乗り越えるために生み出されたイニシエーション概念と思春期の関連を、より詳細に検討する必要性を論じている。また、小島(2021)では、イニシエーションの観点から論じられた国内の事例研究を収集し、内容の精査をおこなった。その結果、対象となった17件中の11件と、半数以上が思春期のクライアントを対象としていることがわかる。ただし、この研究における対象論文は、事例研究を多く扱っている学会誌に1994年～2019年の間に掲載されたものに限られ、相談機関の紀要等の事例論文は含まれていない。この点に関しては、さらなるデータ収集と精査が必要であるが、少なくとも学会誌で一定の学術的価値を認められた水準の知見という次元においては、これまで、思春期の臨床心理学的問題とイニシエーション概念とを結びつけて捉える視点が

支持されてきていると言える。

ところが、思春期とイニシエーションの関連について論じた理論的・概念的研究は、岩宮(2000)と河合(2005)を除いてほとんどみられない。岩宮(2000)は、思春期を「魔」に襲われる時期であるとし、学校現場と未開社会のイニシエーションの構造的類似を指摘するほか、漫画『陰陽師』やひきこもりの臨床事例を素材として、思春期にみられるイニシエーションの特徴について身体性の観点などから議論を展開している。河合(2005)は、思春期の第二性徴に伴う心理的变化や不登校・ひきこもり・いじめといった一見ネガティブに捉えられやすい問題行動とイニシエーションの関連について論じ、そうした思春期特有の「荒れ」の中に変容を促す創造的な側面が隠れていることを指摘している。

これらの知見は、思春期の子どもに特有な行動や思考をイニシエーションの観点から理解することで、治療の進展に有用な視点をもたらされることを論じる一方で、個別の事例や物語の分析を重視しているため、思春期という概念がイニシエーション概念といかなる接点を有するのかについての検討はあまりなされていない。もちろん、臨床的に有用な情報を得るためには、クライアントや物語の登場人物といった人間の心の動きに焦点を当てることが重要であると考えられているが、思春期とイニシエーションの関連を概念レベルで検討することにも大きな意義があるといえるのではないだろうか。

こうした知見を踏まえたうえで、イニシエーション概念の視点から思春期の心理的問題をどう理解するのかをさらに一歩進めるためには、一つの事例や物語をイニシエーションの観点から分析するのみならず、思春期という時期や概念のいかなる特性がイニシエーション概念と関連をもつのかについて、さらに細やかに再検討することが必要と考えられる。

(3) 思春期概念の境界性

思春期 (puberty) とは、主として 10～18 歳の時期を指す年齢区分である。児童期と成人期の間に位置し、10 歳～30 歳を占める青年期との関係でいえば、10 歳～14 歳のプレ青年期および 14 歳～17 歳の青年前期に相当する(笠原, 1976)。

佐藤(2014)によれば、現在わが国で広く用いられる思春期の定義は、女性の場合は「性機能の発現、すなわち乳房発育、陰毛発生などの第 2 次性徴出現に始まり、初潮を経て第 2 次性徴の完成と月経周期がほぼ順調になるまでの期間をいう。その期間は、わが国の現状では、8～9 歳ごろから 17～18 歳ごろまでになる」(日本産科婦人科学会, 2013)である。また、男性の場合は「精巣容積の発育、男性ホルモンの急増がほぼ 12 歳前後で、18～19 歳でピークに達し、その後はプラトーになっているところから、思春期を 11～12 歳から 18～19 歳までと考えている」(安藤, 1988)というものである。

青年期は、より心理・社会的な性質が強い年齢区分とされるのに対して、思春期の英訳 “puberty” はラテン語で恥毛を意味する “puberts” が語源となっていることからわかるように、思春期は身体的成長を示す年齢区分であるとされる(Laplane, et, al., 1971/1972)。したがって、その始まりは上記の定義にもみられるように、多くの子どもの中で第二性徴が発現する 10 歳頃とされ、この点はわが国の多くの精神医学的議論を眺めてもほぼ共通している(笠原, 1976; 清水, 1990, 2006)。

心理臨床的な観点からも、10 歳という年齢は大きな分岐点となることが指摘されている(大山, 2015)。例えば、この時期には、自我の確立の契機となる自我体験 (Ich-Erlebnis) (Bühler, 1967/1969)が生じ

ることが知られている。自我体験とは「自分が自分自身であるということの意識化の体験」(西村, 1978)であり、当人に意識されない場合も多いものの、「私は他でもない私である」「いや本当に私なのか」「なぜ私なのか」という強烈な感覚が生じる体験である(大山, 2015)。

また、臨床描画法の一種である風景構成法では、10歳前後にその描画構成の仕方に質的な変化が生じることが報告されている(高石, 1996)。それは、「川が立つ」(山中, 1984)と呼ばれる現象であり、これまで川を画用紙の下部に横向きに描いていた子どもたちが、10歳頃を境に突如として画用紙を縦に貫く形で描くようになり、全体としても俯瞰図的な真上からの視点で描くようになる。その後、描画の視点は徐々に下がり、鳥瞰図的な斜め上からの構図に落ち着いていくこととなる。高石(1996)は、こうした描画構成の変化と自我発達との関連について、「自我と対象との距離は少しずつ大きくなるのではなくて、あるとき一気に無限大にまで遠ざけられ、そこから徐々に適切な距離へと収束していくのではないかとし、「宇宙の無限さや、生と死の不思議に目をひらかれ、『基底線』のようなそれまでの拠り所を一気に失うのが、この時期の心性の特徴」であると述べている。このように、10歳前後は、第二次性徴という生物学的な変化のみならず、心理的・認知的にもいわば“断絶”とも呼べるような大きな変化が生じる時期であることがわかる。思春期を境界として強迫症、離人症、統合失調症といったさまざまな精神疾患が生じやすくなることも、このことと無関係ではないだろう。

Blos(1967)が第二の個体化過程として親からの分離の過程を定式化したのは、10～12歳の前思春期(preadolescence)にあたる時期であった。また、Masterson(1972/1979)は、第二の個体化期に見捨てられ抑うつを体験し、その防衛として境界例心性が高まることを指摘している。

その一方で、思春期の終わりに関する統一的な見解は今のところ得られていない。皆川(1980)は、「puberty は第二次性徴の発現に始まり、長骨骨端線の閉鎖をもって終結する、主に身体的成長の過程を意味する概念である」としたうえで、その終わりの年齢を18歳としており、清水(1990)も同様の立場を取っている。

これに対して、思春期の終わりの時期は社会や文化によって左右される相対的なものであるとする立場もある。斎藤(1998)は、近年増加傾向にある社会的ひきこもりを思春期心性に深く根差した問題であると捉え、その特徴の一つとして思春期に独特の第二次性徴の発達に伴う葛藤パターンを二十代後半に至るまで抱き続けていることを挙げている。また、滝川(2004)は、「思春期の始まりは生物学的に定まっている(精通、初潮、二次性徴)のに対して、思春期の終わりは生活様態(文化)が高度化するほど先に延びることになる」と述べ、思春期という年齢区分に生物学的な要因のみならず社会的な要因を組み込む立場を取るとともに、思春期の遷延化を指摘している。

上記のように、もともと生物学的・身体的変化を意味していた思春期概念は、時代を経るにつれて心理・社会的な性質を帯びることになったといえる。そして、思春期の始まりは第二次性徴の発現という生物学的成熟に規定されるとする見解が大部分を占める一方で、思春期の終わりは生物学的要因のみならず社会的成熟に規定されるため、明確に区切ることはできないとする立場が生じてきたと考えられる。また、一般的に発達心理学で論じられる発達段階の中に「思春期」という段階が設定されることはほとんどない(佐藤, 2014)にもかかわらず、思春期の心性を論じる心理学的研究は多数みられることから思春期という発達区分の特殊性を窺い知ることができる。現代では思春期という発達区分に心理・社会的

な意味合いが色濃く付与されていると考えることができる。

したがって、本来生物学的な発達区分を示していた思春期概念は、心理・社会的な発達区分であり、同じく現代における遷延化が指摘されている(笠原, 1976 など)青年期概念に接近しつつあると考えることができる。この背景には、adolescence (青年期) と puberty (思春期) の用語上の混乱がしばしばみられること(皆川, 1980)や、語源としては「恥毛」を意味する puberty が「思春期 (春を思う時期)」といういかにも心理・社会的かつ詩的なニュアンスをもつ日本語に翻訳されて用いられているというわが国特有の事情も関係しているのかもしれない。その一方で、“思春期病棟”、“思春期学(Adolescentlogy)”(笠井・岡ノ谷・能智・福田編, 2020 など)といった区分や思春期特有の心性として“中二病”という言葉が現代社会で広く使用されていることにみられるように、青年期概念に吸収されない思春期特有の心理的問題に着目した議論は、先述したとおり現在でも活発に行われている。

このことから、“大人でもない、子どもでもない”思春期を生きる青年たちが「私は他でもない私だ」といった自と他の境界にまつわる内的体験をもちやすいというだけでなく、現代社会において児童期と成人期の上に位置する「思春期」という概念自体も青年期概念との境界が曖昧になっていることがわかる。つまり、思春期は生理的成熟と社会的成熟の両方に規定されるものであり、時代を経るにつれて青年期概念との異同が曖昧になるという境界的な性質をもちつつも、青年期とは異なるニュアンスを有し、確かな存在感を放っているところに一つの特徴があると言えるだろう。

文化人類学者 Turner, V.(1969/2020)は、van Gennep(1909/2006)がイニシエーションの三段階である分離・過渡・統合の中でも、過渡段階を「境界の段階 (liminaires)」と名づけて特に重視したことに注目し、境界の段階にある人間の特徴をリミナリティ (境界性; liminality) として描き出した。Turner(1969/2020)は、「境界にある人たちはこちらにもいないしそちらにもいない。かれらは法や伝統や慣習や儀礼によって指定され配列された地位のあいだのどっちつかずのところにいる」と述べている。このようなどっちつかずの曖昧な状態は、自と他の区別のはざ間を揺れ動くとともに、既存の価値観を捉え直し、親から分離しようとしたり、反抗したりするなどして独自の価値観を打ち立てていこうとする思春期を生きる青年の心性のみならず、青年期概念と重複しながらも確かな存在感を放つ思春期概念自体にも当てはまると考えることができ、ここにおいて思春期概念とイニシエーション概念との関連を見出すことができるのである。

(4)近代社会におけるイニシエーションの喪失と思春期・青年期の誕生

本節では、近代社会において制度的なイニシエーションが失われたことと、思春期・青年期概念が誕生したこととの関連について検討する。

社会学者 Musgrove, F.(1964)は、「青年期 (adolescence) は蒸気機関とともに発明された。蒸気機関の主たる設計はワットによって 1765 年に発明され、青年期はルソーによって 1762 年に発明された」ⁱⁱⁱと述べ、産業革命と青年期概念の成立の関連について指摘している。白井(2012)によれば、18 世紀の産業革命以来、若者は労働力として酷使されていたが、19 世紀を通じてなされた教育制度の整備によって労働の義務が猶予され、自らの人生を選ぶための猶予期間としての青年期が成立した。このような歴史的背景から、青年期は 18 世紀の産業革命によって発見され、19 世紀の教育制度の整備によって成立し

たと考えられている(山村, 1988)。

近代における子どもの発見について論じた Ariès, P.(1960/1980)によれば、近世のフランスには子ども期 (enfance)、青年期 (jeunesse)、老年期 (vieillesse) の 3 つしかなかったという。また、当時の青年期が意味していたのは、「青少年期 (adolescence)」ではなく、中年 (âge moyen) であったことを指摘している。18 世紀までのフランスでは、青少年期と子ども期は混同されており、「子ども (puer)」と「青少年期 (adolescence)」という言葉は区別されずに用いられていた。19 世紀において近代的な意味での子ども概念が発見され、子どもと大人が分離されたことに伴い、子どもから大人への移行期としての青年期が導入されることになった。

このように、青年期 (adolescence) が社会の変化によって生み出された概念であり、時代によって相対的な意味を持つということは、青年期の前半を占める思春期 (puberty) 概念にも当てはまると考えられている(志村, 1988)。もちろん、18 世紀以前のヒトにも第二次性徴の発現から長骨骨端線の閉鎖までの期間は存在したが、その時期を思春期として捉える観点は欠如していた。

現代の若者の場合、生理的成熟のあとに社会的成熟がもたらされると考えられるが、未開社会の若者の場合、生理的成熟は社会的成熟に必ずしも先行しなかったことが知られている。van Genep(1909/2012)は、「幼年期から青少年期への移行の際に行うありとあらゆる儀礼、儀式や慣習をまとめて『成熟期の儀礼』と称するのはますます不適當である」と述べ、生理的成熟は、社会的成熟をもたらす制度的なイニシエーションとは必ずしも対応しないことを指摘した。つまり、未開社会において生理的成熟と社会的成熟の時間的前後は文化によって異なっていたのである。その後、近代化によって教育制度が導入され、現代のように生理的成熟が社会的成熟に先行するようになっていったと考えられる。性機能の発達に特徴づけられる生理的成熟と、未開社会では制度的なイニシエーションによって与えられていたのに対して近代社会ではその基準が極めて曖昧になった社会的成熟との間に明瞭な時間的順序が生じたことが、近代社会における思春期および青年期の成立に大きな影響を与えたと言えるだろう。

先にも触れたように、Eliade(1958/1971)は「近代世界の特色の一つは、深い意義を持つイニシエーション儀礼が消滅し去ったことだ」と述べた。これは、共同体によって担われていた、若者に社会的成熟をもたらす儀式を社会が喪失したことを意味する。このことは、産業革命および教育制度の導入による近代化の推進や、それと時期を同じくする思春期・青年期の出現と対応しているかのように見受けられる。すなわち、社会がイニシエーションを喪失し、若者に対して社会的成熟をもたらす手段を失ったことが、思春期・青年期という発達段階を誕生させたと考えられるのである。

心理臨床の領域では、近代社会におけるイニシエーションの喪失によって、思春期・青年期を生きる現代の若者が大人になることの難しさを論じた言説は、河合(1983)をはじめとして数多くみられる。これに対して、近代社会におけるイニシエーションの喪失こそが、まさに思春期・青年期を生み出したとする議論は、以下の中島(1997)と鈴木(2014)を除いて、ほとんどなされてこなかった。中島(1997)は、「イニシエーションを失った代わりに、青年期という制度が、子供と成人との間に発生してきた」と述べ、青年期全体を通してイニシエーションがなされていくと捉えている。精神科医の鈴木(2014)は、後述する三浦(2001)の論に依拠して、社会が通過儀礼を提供できなくなったことを現代のひきこもりの成因論

の一つに挙げている。一方で、これらの研究は、近代社会におけるイニシエーションの喪失と思春期・青年期の誕生にいかなる歴史的背景があるのかについて論じてはいない。

三浦(2001)は、著書『青春の終焉』(講談社)の中で、かつて日本で盛んに用いられた「青春 (youth)」という言葉が 1960 年代を境に急速にその輝きを失うまでの過程を分析している。三浦が青春の研究を「ひとつの死語をめぐる考察」と述べたように、明治時代に西洋文化から輸入され、文学を中心に使用されるようになり、大正から戦後にかけて日本社会にあふれていた青春という言葉は、学生運動がピークを迎える 1968 年を最後に、1970 年代以降は消えていくことになったという。

なお、三浦は youth の訳語として青年および青春という用語をさほど区別なく使用しており、精神医学や心理学で使用される adolescence の訳語としての青年期および青春期との異同は明らかではない。しかし、「青年および青春は、産業資本主義と軌を一にして全世界に浸透していった」(三浦, 2001)と述べていることから、われわれは三浦の用いる youth (青年、青春) と、同じく産業革命を期に形成された adolescence (青年期、青春期) をほぼ同義の概念とみなすことができるだろう。

三浦(2001)は、青春の出現と未開社会のイニシエーションの関連について、以下のように述べている。

「青春も、青年も、資本主義の勃興、市民社会の勃興とともに生じた集団概念であるとすれば、それはかつて通過儀礼として共同体の内部に組み込まれていた『失うものは何もない』というひとつの状態を、共同体の内部ではもはや支えきれなくなったという事実を示している。それはかつて共同体の通過儀礼のなかに含まれていたひとつの瞬間が、ひとつの持続として引き延ばされ、目に見える集団として共同体の外部にはじきだされたことを物語っている。すなわち、青春も青年も、はじめから『失うものは何もない』というこの根源的な地点の雰囲気濃厚に帯びていた、いや、その代替物として登場したのだ。」

ここでの「失うものは何もない」は、人間のもつ死を覚悟する意識、死を恐れぬ姿勢と言い換えることができるだろう。未開社会のイニシエーションは、この「失うものは何もない」という死と隣接した根源的な地点を通過する体験こそを要としていたと三浦(2001)は述べる。これは、van Gennep(1909/2012)が指摘したイニシエーションにおける死と再生のシンボリズムを表す体験である。

また、三浦(2001)は以下のようにも述べている。

「青春とは非日常が日常となる時空、祝祭の時空の別名である。青年が、また青春が、あたかも近代の伝染病のように世界を覆ったとき、世界はそれをそのようなものとして受け容れた。すなわち、かつて季節の巡りとともにあった祝祭を、ひとつの集団に、ひとつの現象に託したのである。」

聖と俗の価値転換は、イニシエーションの果たす重要な役割の一つである(van Gennep, 1909/2012)。三浦(2001)によれば、かつて共同体によってもたらされるイニシエーションの中で若者が体験していた非日常の世界は、近代社会において青年期というひとつの集団、あるいは青春というひとつの現象に置き換えられることになった。具体的には、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパで活発化したドイツのワンダーフォーゲル、イギリスのボーイ・スカウトなどの青年運動がこれに当てはまるだろう。彼らは同一年齢集団を形成し、共同体の外にイニシエーションの契機を求めようになっていった。

このように、近代社会におけるイニシエーションの喪失こそが心理・社会的な発達段階としての思春期・青年期を生み出したと考えることができる。制度的なイニシエーションの喪失は、それまで社会や

文化によって左右される相対的な発達段階であった思春期の制度化(山村, 1988)をもたらした。これは、現代社会におけるイニシエーションの個人化(河合隼雄, 2000)や子どもと大人の間境界の喪失による内的なイニシエーションの難しさ(河合俊雄, 2020)といった問題にもかかわると考えられる。思春期・青年期がイニシエーションの喪失を前提として成立した発達段階である以上、現代社会における子どもと大人の境界は曖昧にならざるを得ず、思春期・青年期の遷延化や、あるいは正反対にその消失(Friedenberg, 1959; 山村, 1988)が叫ばれることになるのである。

(5)イニシエーションにおける空間の両義性と自立をめぐる思春期の心理的テーマ

本節では、思春期とイニシエーション概念の関連についての第三の視点として、未開社会の成人式儀礼において用いられる空間のもつ両義性とグレート・マザー元型の両義性との共通点に着目し、思春期の自立をめぐる心理的テーマとの関連について考察する。

思春期は、「蛹の時期」(山中, 1978)と呼ばれる。蛹(さなぎ)とは、幼虫が成虫へと変態する過程の一時期を指す。蛹の時期に入った生物は、ドロドロとした変容過程にある体を守るための“空間”を形作る堅い殻に覆われて、ほとんど動かない。山中(1978)は、思春期に不登校となり、家にこもって趣味に没頭するなどの過程で象徴的に内的成熟を果たしていく子どもの様子を蛹に見立て、思春期内閉論を展開した。また、これと同様に、河合(1992)は、「さなぎが堅い殻によって守られているように、思春期の子どもも堅い守りを必要とする」と述べている。それでは、思春期の子どもに対する堅い殻のような守りとはいかなるものを表すのであろうか。

岩宮(2000)は、突然不登校になり、強迫症状から着替えもできず、自分の部屋に引きこもっていた思春期女子の事例の中で、彼女が3か月ぶりに風呂に入ったという変化が生じたことについて、彼女にとって「自分の内側で起こっている急激な変化を支えるため、外部の環境は孵卵器のように安定した状況に保たれてしっかりと守られることが必要不可欠」であったと述べている。また、岩宮(2000)は、このように激しい内的な変化を遂げる思春期の心性には守りが必要となることについて、岡野玲子の漫画『陰陽師』(白泉社)の登場人物のひとりであり、シャーマンの素質を持ち怨霊を引き寄せる能力を持つ思春期の少女・真葛がいつも安倍晴明の張る結界に守られていることに例えている。そのうえで、上記のクライアントにとっての結界は、「母親をはじめとする家族の理解の態度」であったと述べている。家族がクライアントの症状を理解し、温かい姿勢を示したからこそ、彼女は少しずつ活動範囲を自分の部屋から家全体にまで広げ、外出もできるようになっていった。この点は、河合(1992)が『守り』を提供するのは、両親であり教師であり、その背後にある社会全体である。このような『守り』がうまくはたらくときには、思春期の子どもは、もちろん、ある程度の荒れを経験するが、そのうちに危機を通り抜けてゆくものである」と論じていることにもつながる。

このように、イニシエーションのもつ役割の一つとして、変化の過渡にある人物に対して物理的・心理的な守りの空間を提供することが挙げられる。このことは、「状態が変化すれば、それは社会的生活、個人的生活に支障をきたさざるを得ず、通過儀礼の中にはこの変化から来る悪影響を軽減するのが目的のものがある」という van Genneep(1909/2012)の指摘にも示されている。

ところが、イニシエーションの空間は修練者の身を守るという安全で温かな性質のみを有するのでは

ない。このことは、未開社会の成人式儀礼で用いられる小屋の性質に目を向けると明らかである。未開社会において成人式が実施される空間は、修練者を変化から守る場としての機能と、修練者に対してイニシエーション的試練に伴う苦痛が与えられる場としての機能という両義的な性質をもっている。Eliade(1958/1971)によれば、未開社会の成人式では、修練者を小屋の中に置き去りにするものがあるが、その小屋はワニや蛇といった水の怪物の体やその開いた口を表すとされ、「小屋に監禁されるのは怪物の腹中に幽閉されるのと同じ」であるとされる。修練者が小屋の中に閉じ込められてイニシエーション的試練を与えられることは、神話的動物に殺され、ずたずたに引き裂かれ、その口の中でかみつぶされ、腹の中で消化されてしまうことを表す。しかし、その小屋は、貪欲な怪物の腹をあらわすだけでなく、母胎をもあらわしているという(Eliade, 1958/1971)。つまり、成人式用の小屋は、死とそれに続く再生という永遠の魂のドラマを表現する祖型的な (archétypal) 心象^{iv}の一つであり、修練者が食べられ、消化されるすべてを呑み込む怪物の腹であると同時に、彼らが新しく生まれるための養分を与える母胎でもあるとされる(Eliade, 1976/2014)。

もちろん、すべての未開社会の成人式が聖なる空間の中で実施されるわけではないが、母親をはじめとする女性から修練者を引き離し、人里離れた小屋に隔離することはイニシエーションの分離段階として重要な意義をもつと考えられている。van Genep(1909/2012)もオーストラリアのトーテム結社への加入礼やオジブワ族におけるミデ結社への加入礼などで聖なる小屋が用いられる例を挙げている。

このような未開社会の成人式儀礼において用いられる空間がもつ両義性には、Jung 心理学で論じられる母元型の両義性と共通の性質を見て取ることができる。母親は、子どもを包み育む肯定的な側面と、それとは正反対に、子どもを呑み込み死に至らしめる否定的な側面の相反する二つの性質をもつとされている(Neumann, 1963/1982)。こうした個人的な母親とは区別される“大なる母”の性質は、普遍的無意識の中に存在する基本的なイメージの様式の型である元型の一つに数えられ、Jung 心理学ではグレート・マザー (太母) と呼ばれる。例えば日本では、子どもを誘拐して食い殺していたが、釈迦による改心のあとは子どもの守り神となった鬼子母神や、国生みを行い、死して後に黄泉の国の支配者となったイザナミなどの形で、日本人の心の中に現在も生き続けている。

思春期は、これまで絶対的であった親の価値観を相対化し、自分なりの価値観や生き方を探ろうとする中で、こうした内なるグレート・マザー元型との対峙が生じやすくなる時期であると考えられている。河合(1967)は、不登校の中学二年生の男子との面接過程で、クライアントから報告された肉の渦に呑み込まれる夢について、「太母の象徴としての渦のなかに足をとられて抜けがたくなっているのではないか」という元型的な視点から理解することを試みている。つまり、クライアントは不登校という行動様式を通して、内なるグレート・マザー元型からの自立という心理的なテーマに取り組んでいると理解することができるのである。

こうしたグレート・マザー元型を象徴する空間が持つ両義性とイメージとの関連について、小島(印刷中)では、思春期男子の親子関係における依存欲求および独立欲求の質問紙尺度得点の高低と統合型HTP法の描画特徴との関連から実証的に論じている。そこでは、描画に描かれた人物が「家に入る」および「家から出る」ことと依存欲求の高低との間に有意な相関がみられたことについて、イニシエーションの観点から検討した。「家に入る」は両親への接近欲求が高い依存高群に多く、反対に、「家から出

る」は依存低群に多かったことから、一見すれば両親への依存欲求が高い描き手が「家に入る」シーンを描きやすいのではないかと捉えることができる。しかし、描画を詳細に観察すると、住み慣れた自分の家に入ろうとするものだけでなく、見知らぬ建物や小屋に人物が入ろうとするシーンを描いた描画作品がみられた。このような、描画に描かれた人物に馴染みの無い建物とイニシエーションで利用される小屋などの空間のもつ性質の類似性に着目し、「怪物の腹」(Eliade, 1958/1971)とまで形容されるような馴染みの無い空間に入るシーンを描く点に、描き手の自立の萌芽を読みとることができるのではないかとこの点について論じている。

河合(1980)が述べるように、人間が自立していくためには、グレート・マザー元型の否定的な側面を現実の母親に投影して問題を起こすのではなく、自分の内界に存在する母なるものから自立してゆくとともに、現実の一個の人間としての母親とはお互いに限界をもった人間同士として付き合っていくことが必要とされる。“母なるもの”がもつ矛盾する二つの側面を分裂させることなく、一個の存在として自身の内面に統合させていくことが重要であると言えよう。また、決して現実の母親と内なる母を混同させることなく、“母なるもの”という元型的な視点から捉えていくことも重要である。

このように、未開社会の成人式で用いられる空間とグレート・マザー元型には、子どもを包み育む子宮のような肯定的側面と子どもを呑み込み死に至らしめる怪物の腹のような否定的側面の相反する二面性を持つという共通の性質が存在する。河合(1980)が、「多くの宗教的儀式は、人間が自分の内界の深層に存在する恐ろしい元型に直面することを避けるために、人間が見出してきたものと言うことができる」と述べていることからわかるように、未開社会の成人式は、修練者が思春期にテーマとなりやすい内なるグレート・マザー元型との対峙を直接的に体験することを避けるために、両義的な空間の中で、グレート・マザー元型の有する両義性を象徴的に体験させる役割を果たしていたと考えることができる。

(6)本研究のまとめと今後の課題

本研究は、思春期とイニシエーションの関連について、主として理論的な観点から検討することを目的とした。これまで思春期は、子どもから大人へと成長する移行期にあたり、イニシエーション概念とも関連の深い時期であると考えられてきた。ところが、思春期とイニシエーションの関連について論じた研究は、思春期のクライアントを対象とした事例や思春期の主人公が登場する物語をイニシエーションの観点から分析したり、思春期の行動面の荒れや特異性と未開社会のイニシエーション儀礼との象徴的な類似性に着目したりするものが多く、思春期のいかなる特性がイニシエーション概念と関連するののかについて詳細に論じられることはほとんどなかった。

そこで、本研究では、以下の三つの視点から思春期とイニシエーション概念の関連について検討した。すなわち、第一に、現代の思春期は終わりの時期が不明瞭であり、青年期概念との異同が曖昧になりながらも、思春期の有する独自性から一つの年齢区分としての地位を確立しているという特徴に着目し、思春期という概念自体がイニシエーションの過渡段階と類似の性質をもつと考えられることについて論じた。第二に、近代社会におけるイニシエーションの喪失が思春期・青年期という年齢区分を誕生させたことについて、思春期・青年期概念成立の歴史的背景を元に検討した。第三に、未開社会の成人式儀礼で用いられる空間の有する両義性とグレート・マザー元型の両義性との共通点に着目し、未開社会の

成人式儀礼が思春期の自立の課題に伴うグレート・マザー元型との心理的対峙を象徴的に体験させるものであるという視点から、思春期の心理的テーマとの関連について論じた。

これまで思春期とイニシエーションの関連について論じた研究は、臨床事例におけるクライアントや物語の登場人物を対象として、思春期の心理的な揺れ動きや行動面の荒れを、死と再生のテーマを持つイニシエーション儀礼との象徴的な類似性から理解しようとする議論が中心であった。本論では、思春期概念の持つ境界的な性質や思春期概念の成立過程を検討することを通して、思春期という発達区分が概念のレベルでイニシエーション概念と関連をもつことを明らかにした点に意義があると考えられる。

本研究では、主として理論的な視点から思春期とイニシエーション概念の関連について論じてきたため、今後は具体的な事例や物語を素材として、本稿で論じた内容を検証していく必要があるだろう。また、海外の理論や思春期の心性にも目を向け、さらに包括的な議論を行うことが今後の課題として挙げられる。

引用文献

- 安藤弘(1988). 思春期の概念と思春期保健. 安藤弘(編). 続・思春期保健学：主として男性編. 同文書院. pp1-19.
- Ariès, P.(1960). *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*. Paris: Éditions du Seuil. (杉山光信・杉山恵美子(訳)(1980). 〈子供〉の誕生；アンシャン・レジーム期の子供と家族生活. みすず書房.)
- Blos, P.(1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic Study of Child*, **22**. pp162-186.
- Bühler, C.(1967). *Das Seelenleben des Jugendlichen: Versuch einer Analyse und Theorie der psychischen Pubertät*, 6 erweiterte Auflage. Stuttgart: Gustav Fisher Verlag. (原田茂(訳)(1969). 青年の精神生活. 協同出版.)
- Eliade, M. (1958). *Birth and rebirth: The religious meanings of initiation in human culture*. New York: Harper & Brothers Publishers. (堀一郎(訳)(1971). 生と再生—イニシエーションの宗教的意義—. 東京大学出版会.)
- Eliade, M. (1976). *Initiation, rites, sociétés secrètes*. Paris: Gallimard(Collection folio/essais). (前野佳彦(訳)(2014). 加入礼・儀式・秘密結社 神秘の誕生—加入礼の型についての試論. 法政大学出版局.)
- Friedenberg, E. Z.(1959). *The Vanishing Adolescence*. Boston: Beacon Press.
- van Gennep, A.(1909). *Les rites de passage: Étude systématique des cérémonies*. Paris: Libraire Critique. (綾部恒夫・綾部裕子(訳)(2012). 通過儀礼. 岩波書店.)
- 岩宮恵子(1994). イニシエーションの過程としてみた治療場面—摂食障害の少女の思春期体験と「かぐや姫」イメージ—. 箱庭療法学研究, **7(2)**, 3-14.
- 岩宮恵子(2000). 思春期のイニシエーション. 河合隼雄(編). 講座心理療法 1 心理療法とイニシエーション. 岩波書店. pp105-150.
- 岩宮恵子(2011). 思春期の心理的課題と問題. 日本心理臨床学会(編). 心理臨床学事典. 丸善出版株式会社. pp146-147.

- Jung, C. G. (1953). *Two Essays in Analytical Psychology, Collected Works, Vol7*. New York: Pantheon Books Inc. (松代洋一・渡辺学(訳)(1995). 自我と無意識. 第三文明社. レグルス文庫.)
- 笠原嘉(1976). 今日の精神病理像. 笠原嘉・清水將之・伊藤克彦(編). 青年の精神病理 第 1 卷. 弘文堂. pp3-28.
- 笠井清登・岡ノ谷一夫・能智正博・福田正人(編)(2020). 人生行動科学としての思春期学. 東京大学出版会.
- 河合隼雄(1967). ユング心理学入門. 培風館.
- 河合隼雄(1975). 心理療法におけるイニシエーションの意義. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, **2**, 123-128.
- 河合隼雄(1980). 家族関係を考える. 講談社.
- 河合隼雄. (1983). 大人になることのむずかしさ: 青年期の問題. 岩波書店.
- 河合隼雄(1992). 子どもと学校. 岩波書店.
- 河合隼雄(2000). 〈総論〉イニシエーションと現代. 河合隼雄(編). 講座心理療法 1 心理療法とイニシエーション. 岩波書店. pp3-18.
- 河合隼雄(2005). 思春期のイニシエーション. 臨床心理学, **5**(3), 金剛出版. 340-344.
- 河合俊雄(2020). 心理療法家がみた日本のこころ—いま, 「こころの古層」を探る—. ミネルヴァ書房.
- 北山修(1989). 移行期における〈わたし〉の危機. 岩波講座 転換期における人間 3 心とは. 岩波書店. pp281-312.
- 小島純一(2020). 分析心理学におけるイニシエーション概念についての研究. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **23**. 54-66.
- 小島純一(2021). 心理臨床におけるイニシエーション概念についての研究 —セラピストとクライアントの関係性に着目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **67**. 249-262.
- 小島純一(印刷中). 思春期男子の親子関係における依存欲求および独立欲求と統合型 HTP 法の描画特徴の検討 —イニシエーションの観点から—. 箱庭療法学研究, **34**(3).
- Laplane Robert et Denise., Lasfargues Géraud. (1971). *La Puberte*. Presses Universitaires de France. (石田春夫(訳)(1972). 思春期. 白水社.)
- Masterson, J.(1972). *Treatment of the borderline adolescent: a developmental approach*. New York: Wiley-Interscience. (成田善弘・笠原嘉(訳)(1979). 青年期境界例の治療. 金剛出版.)
- 皆川邦直(1980). 青春期・青年期の精神分析的発達論—ピーター・ブロスの研究をめぐって. 小此木啓吾(編). 青年の精神病理 第 2 卷. 弘文堂. pp43-66.
- 三浦雅士(2001). 青春の終焉. 講談社.
- Musgrove, F.(1964). *Youth and the Social Order*. London: Routledge & Kegan. Paul.
- 中島義実(1997). 現代におけるイニシエーションの制度的困難と発動契機への個人的遭遇—文献的展望による青年期理解の試論—. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, (44), 165-176.
- Neumann, E.(1963). *The Great Mother—An Analysis of the Archetype*. (translated by Ralph Manheim) Second edition, Princeton University Press/Bollingen Foundation Inc. (福島章他

- (訳)(1982). グレート・マザー：無意識の女性像の現象学. ナツメ社.)
- 日本産科婦人科学会(編)(2013). 産科婦人科用語集・用語解説集 (改訂第3版).
- 西村洲衛男(1978). 思春期の心理—自我体験の考察—. 井久夫・山中康裕(編). 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社. pp255-285.
- 岡野玲子(1998-2000). 陰陽師 夢枕獏原作. 白泉社.
- 大山泰宏(2015). 改訂新版 人格心理学. 放送大学教育振興会.
- 佐藤有耕(2014). 5章 青年期への発達心理学的接近. 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮(編). 新・青年心理学ハンドブック. 福村出版. pp49-61.
- 斎藤環(1998). 社会的ひきこもり：終わらない思春期. PHP 研究所.
- 清水将之(1990). 青年期と現代—青年精神医学論集. 弘文堂.
- 清水将之(2006). ひとは十代をどう通過するか—臨床の場から考える青年期. 伊藤美奈子(編). 朝倉心理学講座 16 思春期・青年期臨床心理学. 朝倉書店. pp177-190.
- 志村鏡一郎(1988). 思春期の社会史—西洋の場合—. 山村賢明(編). 親と教師のための思春期学 1 思春期とは何か. 情報開発研究所. pp35-62.
- 白井利明(2012). 第1章 青年期へのアプローチ. 白井利明・都筑学・森陽子. 新版 やさしい青年心理学. 有斐閣. pp1-18.
- 篠原道夫(2005). 思春期イニシエーションとしての心理療法—多様な症状を呈した思春期不登校男子との心理療法過程—. 箱庭療法学研究, 18(2), 3-18.
- 鈴木國文(2014). 第1章 同時代人としての「ひきこもり」. 鈴木國文他(編). 「ひきこもり」に何を見るか グローバル化する世界と孤立する個人. 青土社. pp20-43.
- 高石恭子(1996). 風景構成法における構成型の検討—自我発達との関連から. 山中康裕(編). 風景構成法 その後の発展. 岩崎学術出版社. pp239-264.
- 滝川一廣(2004). 新しい思春期像と精神療法. 金剛出版.
- Turner, V. W. (1969). *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Aldine Publishing Company., Chicago. (富倉光雄(訳)(2020). 儀礼の過程. 筑摩書房.)
- 山村賢明(1988). 思春期とは何か—その制度化と変容—. 山村賢明(編). 親と教師のための思春期学 1 思春期とは何か. 情報開発研究所. pp3-33.
- 山中康裕(1978). 思春期内閉 *Juvenile Seclusion*—治療実践よりみた内閉神経症(いわゆる学校恐怖症)の精神病理. 中井久夫・山中康裕(編). 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社. pp17-62.
- 山中康裕(1984). 「風景構成法」事始め. 山中康裕(編). 中井久夫著作集 別巻1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社. pp1-36.

i 後述するように、本論では10～18歳を思春期として扱うこととする。

ii 岩宮(2011)は、「葛藤を抱えるようになるというのは、思春期に入ったという指標である」と述べ、心理学的な観点から思春期の始まりを捉える見方を提示している。

iii 原文は、“The Adolescent was invented at the same time as the steam-engine. The principal architect of the latter was Watt in 1765, of the former Rousseau in 1762.”である。

iv ここには、Jung 心理学の元型 (archetype) 概念の影響が見て取れる。